

就学前教育支援センター 協働研究

杉並区立就学前教育支援センター／成田西子供園（研究実践園）

令和3年度協働研究 主題

全ての幼児が主体的に 生活や遊びに取り組むための 環境構成と援助の在り方

就学前教育支援センターでは、併設する成田西子供園と連携し、
就学前教育の実践的研究を行っています。
その成果を区内の就学前教育施設（幼稚園・子供園・保育所等）に発信し、
保育者の資質向上を図り、幼児の発達に応じた
質の高い教育を推進することを目的としています。



はじめに

幼児は安心できる環境の中で、興味をもったものに自分から関わり、試行錯誤を繰り返しながら考え、様々な課題を乗り越えていくようになります。どこで、誰と、どのように遊ぶか、遊びに必要なものは何か、どのように使うかなど、豊かに遊びを展開する中で幼児は多くの自己決定に出会い、実現する喜びを味わいます。これは、これからの時代を生き抜くために必要な資質・能力を身に付けていく過程ともいえます。

幼児が豊かな遊びを展開していくためには、幼児の自発性を尊重しながら保育者が適切に関わり、意図的・計画的に環境を構成していくことが重要です。また、幼児一人ひとりの特性を理解し、全ての幼児にとって生活しやすい環境と援助を工夫することが求められます。

区内の就学前教育施設では、多様な子どもたちが生活をしています。家庭の中では気にならない子どもの様子も、園という集団の生活や遊びの中では「気になる子」として配慮が必要になることも多くなってきています。就学前教育施設が全ての幼児にとって、幼児期にふさわしい生活や遊びを積み重ね、一人ひとりの発達に必要な体験が得られる場となるよう、保育者が環境と援助について工夫することは、今後さらに重要になってきています。



併設する杉並区立成田西子供園と就学前教育支援センターでは「全ての幼児が主体的に生活や遊びに取り組むための環境構成と援助の在り方」について研究し、環境を中心にした具体的な手立てを開発しています。

幼児の特性及び発達の状態に応じて、発達を全体的に促していくためには保育の充実を図るとともに、園内支援体制の構築、保護者や地域・関係機関との連携を基にした特別支援教育の充実が重要となっています。

全ての幼児が主体的に生活や遊びに取り組むための 環境構成と援助の在り方

特別な配慮が必要な幼児も周りの幼児も、全ての幼児が育つ保育のために

- 特別支援教育コーディネーター※1の園務分掌への位置付け
- 必要な幼児の『個別の指導計画』※2に基づく支援・指導
- 複数保育者による支援体制の整備
- 園内研修の開催と園外研修への参加

※1.特別支援教育コーディネーター

特別支援教育コーディネーターは、園内の保育者、職員全体の特別支援教育に対する理解を推進し、園内の支援体制を構築するとともに関係機関との連携・協力体制の整備を図ります。

■具体的な役割

- ①園内支援体制構築のための情報収集や園内委員会の企画・運営
- ②保護者に対する園の相談窓口
- ③関係機関との連携・協力の推進

※2.個別の指導計画

教育課程を具体化し、障害のある幼児など一人ひとりの実態に応じて指導目標、指導内容及び指導方法を明確にしてきめ細やかに指導するために作成するもの。

- 幼児の様子や子育てに関する情報交換（保護者会、降園時の懇談、園・学級だよりなど）
- 園生活や幼児期の教育への理解促進（保育参観・保育参加など）
- 必要に応じた発達相談等の情報提供

- 巡回相談の活用
- 地域の子ども・子育てプラザ等の子育て支援施設や子ども家庭支援センター等の地域の関連機関との連携
- 保護者が希望する場合の療育機関による保育所等訪問支援等との協力
- 小学校の特別支援教育コーディネーター等との連携



全ての幼児が主体的に生活や遊びに取り組むために

学級のみんなが生活に見通しをもち気持ちよく生活する

生活に必要な能力や態度の獲得については、大人に教えられたとおりに幼児が覚えていく側面が強調されることもありますが、幼児自身が自発的・能動的に環境に関わりながら、生活の中で状況と関連させて身に付けていくことが重要です。

幼児が見通しをもつために

- 幼児は一日の生活の流れや内容が分かると、安心して自分から取り組んだり、次の活動に移るために今やっているものを終わりにして片付けたりするなど、自分から見通しをもって行動できるようになります。
- 3歳児** では生活の流れをルーティン化する、指示は短い言葉で伝える、座るときには視覚情報としてイスを並べておくなどの工夫をしています。
- 4歳児** ではカレンダーに予定を記したり、その日に読み聞かせする絵本を提示したりして、視覚情報からも生活の流れを学級で共有しています。
- 5歳児** では一日の予定表の時刻と時計の文字盤に同じ印を付けて提示しています。当番活動などは幼児が相談して決めた内容を予定表に書き込むことで、自分たちで集まって活動を進めていく姿も見られます。予定表は、当事者だけでなく他のグループにとっても、友達の取組を共有する情報になります。

■時計に同じ印をつけて表示

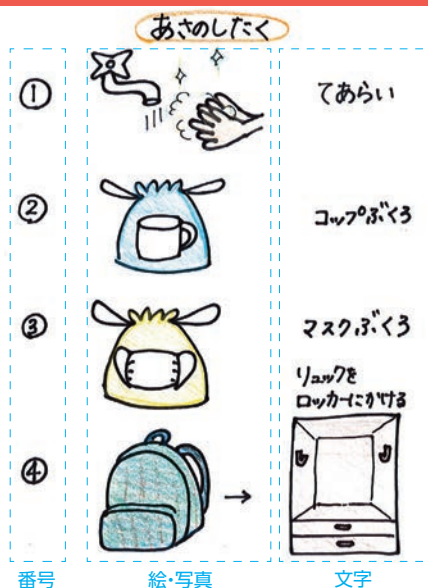


- 1日の流れの中で「自分はこの時間に〇〇をしたい」と決めて自分の名前やマークを予定表に付けることで、進んで取り組む姿につながることがあります。自分から取り組みたいことについて幼児が意思表示をする機会にもなり、保育者はその思いを受け止めて適切に援助することができます。
- 降園前の集まりでも予定表を活用することで、その日の振り返りと翌日への期待を学級で共有することができます。



幼児が自分から生活を進めるために

- 園には所持品の始末、食事、排泄などの生活に必要な活動があります。
- 園生活の自然な流れの中で幼児自身が必要性に気付き、自分でしようとする気持ちをもてるようになることが大切です。
- 絵や写真で手順を示すことは視覚情報となり、幼児が自分から行動する手掛かりとなります。最初は絵や写真を確認しながら取り組む姿もありますが、次第に確認しなくても自分から行なうようになります。



順序を表す「番号」⇒内容の「絵・写真」⇒説明の「文字」の順に表すと幼児に分かりやすい

手順が身に付きやすく、途中

- 個別の幼児のための手順カード (新幹線が好きな4歳児のための例)



- 手洗いを済ませ、カードをめくると新幹線の運転席の絵が出てくる



- 支度が全部終わると、カードの絵は新幹線全車両になる



園生活のいろいろな場面においては、保育者の言葉だけでは幼児にイメージがわからないことや言葉の一部分しか印象に残らないことが分かりやすくなる場合があります。環境を工夫することで、自分で「やりたい」という気持ちで取り組み、「やってみたらできた」という自信に

幼児の自発

自発的活動としての遊びは、幼児の成長や発達にとって重要な体験の中で、物事に対する他の幼児との受け止め方の違いに気付くように関わるのに十分な数や量の遊具や用具、素材があること、それらが

幼児が主体的にもものを取り込んで遊びを楽しむために

- 幼児は身近な環境に好奇心をもって関わる中で、新たな発見をしたり、どうすればもっと面白くなるかを考えたりします。体験したことをさらに違う形や場面で活用し、遊びをますます楽しいものにしていきます。単に環境の中にあるものを幼児が利用するだけでなく、環境の一つ一つが幼児にとって気付きや発見につながり、環境に関わる態度や意欲を育てるものになっていることが大切です。



丸いのは
ドングリちゃん
のおうちのすに
するんだ

ドングリちゃん、
おうちができて
うれしい顔になった

幼児が思わず触れたり選んだりして楽しめるように素材を整える

幼児が感情を表現しながら人との関わりを深めるために

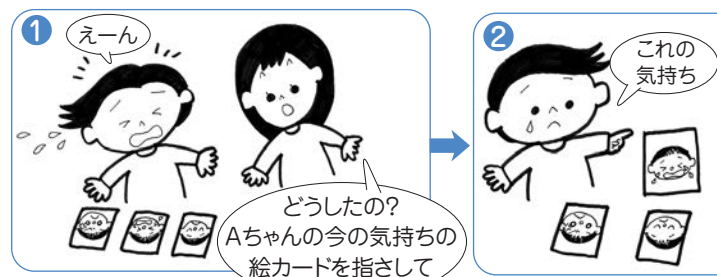
- 遊びが豊かになって幼児同士の関わりが深まってくると、遊びの中でトラブルが起こることも度々あります。自分中心の主張をしながらも少しずつ相手に分かるように伝えようと、相手に伝わることで親しみを感じるようになります。次第に相手の思っていることにも気付くようになり、幼児同士の関わりは深まります。そのためには保育者が幼児の気持ちを代弁したり状況を伝えたりする援助が大切です。
- そのようなときに、表情の絵カードを使うと、幼児は相手の気持ちに気付いたり自分の気持ちを説明したりすることができるようになります。

■表情の絵カードの使い方 (例) 自分の気持ちを伝える

1枚の紙に、3~6種類くらいの表情(例えば、「うれしい」「悲しい」「怒る」「驚く」「困る」など)を、分かりやすくはっきり書きます。1枚ずつの絵カードにした時は、一列に並べます。

自分の気持ちがまだ未分化な幼児や気持ちを言葉で伝えられない幼児に、この表情カードを見せてどの気持ちか選ばせます。

幼児が選んだ表情に、保育者は必ず「怒っているんだね」や「悲しいんだね」などの言葉を添えて、表情と言葉を結びつけるようにしていきます。



ための環境と援助



次の活動への切り替えが 難しい幼児への配慮

★幼児の姿 ●援助と環境の工夫

- ★学級の生活の流れは分かっているけど、自分のやりたい遊びを途中でやめられない幼児もいます。
- 遊びを始める前に「10時になったら」「あと3回やったら」「この絵本の最後まで読んだら」などと終わりの時刻や活動の区切りを幼児と一緒に決めておきます。終わりの時刻の少し前にも言葉掛けをして気付かせます。
- まだ遊びたかった気持ちを受け止めてから、「明日遊びたいことは〇〇ごっこ」などと幼児と一緒にメモを残すことで、気持ちを切り替え、翌日を楽しみにできるようにします。
- 気持ちを切り替えて行動できたときには「片付けができたから次のことができるね。うれしいな。」などと保育者は言葉で伝えながら共感します。このような配慮をすることで、幼児は気持ちを切り替えて行動できることがあります。



でほかのことに注意がそれやすい幼児への配慮

★幼児の姿 ●援助と環境の工夫

- ★身支度や所持品の始末などが身に付きにくい幼児もいます。
- その都度、保育者が声を掛けるのではなく、幼児が自分で気付いて行動できるよう、学級みんなの掲示とは別に一連の流れの絵カードを用意するののも一つの工夫です。例えば、済んだ内容のカードをめくると絵が変化し、最後にはその幼児が大好きな電車の絵になるようにするなど、絵をめくる楽しさから自分から行動する姿を期待します。始めと終わりがはっきりすることで、一連の流れをつかみやすくなります。
- 幼児がやり遂げたら次に楽しいことがあることや、「待っていたよ」などと保育者の気持ちを言葉にして伝えていくことも幼児の意欲を高めます。

あります。そのようなときには具体的な説明と共にイラストや写真などを添えて、視覚からも情報を取り入れられるようにすることでつながります。このような自信が幼児の豊かな遊びの土台となります。

的活動としての遊びが充実するための環境と援助

です。幼児は身近な環境に興味をもって主体的に関わり、試行錯誤を経て、周囲の環境に様々な意味や関わり方を発見します。また、友達と遊ぶなり、互いに自分の思いを主張し合い、折り合いを付ける体験を重ねていきます。このような遊びを通じた体験を豊かにしていくためには、幼児扱いやすいものであり、分かりやすく心地よく整理されていることなどが支えとなります。

- 幼児が遊びや生活を通して身近な環境から刺激を受け、興味をもって主体的に関わるためには、いつ、どのように、何を環境として構成するか、保育者は意図的・計画的に環境と援助を工夫していきます。



人との関わりに関心がなく、自分の好む特定の遊びを繰り返す幼児への配慮

★幼児の姿 ●援助と環境の工夫

- ★同じ遊びを一人で繰り返し楽しむ幼児もいます。
- 保育者は「いろいろな活動に参加してほしい」「友達と遊んでほしい」と願いがちですが、まずは特定の遊びをする幼児が興味をもっていることを大切にします。一人で何かに集中して取り組む時間や一人で休める空間を用意し、安心して過ごせるようにします。
- 特定の遊びに他の幼児も興味をもって関われる環境を用意します。例えば、幼児が一人で音楽を繰り返し聞いている場合は、学級で楽しんだ手遊びやリズム遊びなどの曲を音楽プレーヤーに入れておきます。曲がかかると他の幼児も興味をもって関わり、一緒に歌ったり踊ったりする姿を期待します。



ドングリちゃんが電車に乗って出掛け

もうすぐ海に着くよ



幼児が作ったものですぐに遊べる場を近くに設定する

初めは気持ちが高ぶり、保育者や相手の言葉を聞けない幼児も、絵カードによって表情が分かり、気持ちを表す言葉も増え、落ち着いて話し合いができることもあります。

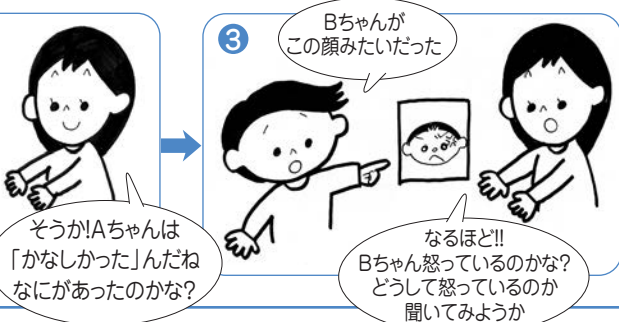
- 幼児期は人との関わりの中で様々な出来事を通して、うれしい、悔しい、悲しい、楽しいなどの多様な感情体験を味わう時期です。マスクの着用で相手の気持ちが読みにくい状況が続く中、表情の絵カードを視覚情報として活用することで、互いの感じ方や考え方に気付けることもあります。

- 学級の集まりで、表情の絵カードから連想して今日の遊びや活動について、発表したい幼児が自分の感じたことを話すようにしています。聞いている他の幼児にとっても絵カードが手掛かりとなって何について話しているかが分かり、学級全体の話し合いが楽しい時間となります。
- 笑顔の絵カードに「ニコニコさん」等の名称を学級で決めて、友達と楽しく過ごすイメージを共有します。トラブルが起きたときや、みんなで学級の決まりを考えるとときには、「ニコニコさん」で遊べるにはどうしたらよいか」と考えるきっかけになります。

■気持ちを表す表情の絵カード



今日
"ニコニコさん"がありました。
それはね～



衝動をコントロールすることが難しい幼児への配慮

★幼児の姿 ●援助と環境の工夫

- ★目の前の出来事に反応して衝動的に動いたり、自分の思いをうまく言葉で表現できなかったりしてトラブルになることが多い幼児がいます。
- 保育室の一角や保育室から近いところにスペースを設定し、そこに行けば「落ち着ける」「気持ちを切り替えられる」という体験を積み重ねられるようにします。
- 保育者が「残念」「なぜ?」と思っていることを、表情の絵カードを使って伝えることから始めることも、幼児の気持ちを落ち着かせます。
- 気持ちが受け止められたと感じる体験を積み重ねることで、幼児が少しずつ気持ちを整理し、安心できるよう保育者は援助します。

話を聞く態度を育てるための環境と援助

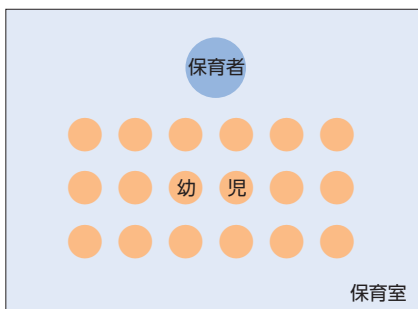
園生活の中で幼児が多様な遊びや活動を楽しみ、経験を広げながら人との関わりを育むために、話を聞く力は大切です。幼児が集中して話を聞き、自分で分かって行動できるようになることは、幼児が学びを深めていくために重要です。そのためには話し手に注目できるよう落ち着いた場を設定したり、話の情報量を減らして簡潔に話したりするなどの援助の工夫が大切です。話を聞くことが楽しいと感じる体験を重ねた結果として、幼児の聞く力が育ち、自分の思いや考えを伝える力も育ちます。

幼児が話に集中できるように

- 日常的な集まりでは座り方を工夫することで、学級のみんなで話を聞く楽しさや、一緒に聞くことで生まれる一体感を感じられるようにします。活動のねらいに応じて座り方を工夫することが大切です。
- 聞くだけでは理解が難しい場合には、絵や写真、文字を効果的に取り入れます。
- 保育者の背景や視界に入る空間をスッキリさせると、どの幼児も保育者に注目しやすくなり、話を聞くことが楽しくなります。

向かい合って座る

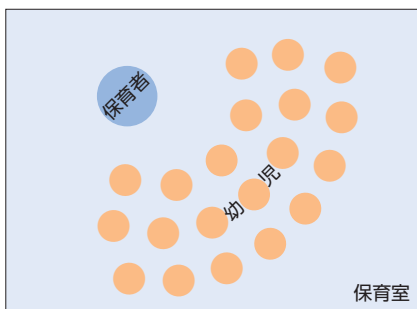
保育者と向かい合うように幼児が座ります。端に座る幼児の正面は壁になるので、横に広がりすぎないようにします。幼児にとって列や順番が分かりやすく、自分たちで並べます。



扇型に座る

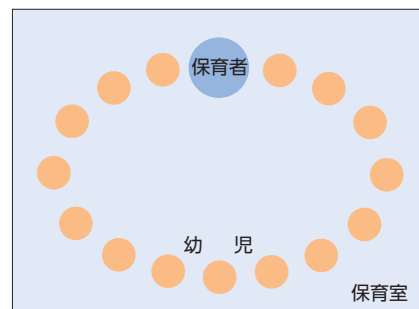
扇型に座ると、どの位置からも幼児の正面は保育者になります。

保育室の角に保育者が立つと壁に囲まれる雰囲気があり、落ち着いて話を聞ける幼児もいます。



円形に座る

幼児と保育者が円形に座ると、話をする人の顔が見えて互いの発言に注目できます。円形に座るときには「これから丸いお皿みたいに座ります」と伝え、幼児にはイメージしやすいようです。



読み聞かせや保育者の話に関心がない幼児への配慮

★幼児の姿 ●援助と環境の工夫

- ★学級で集まり、話を聞くことが苦手な幼児もいます。
- 学級のみで話を聞く活動に参加させようとするよりも、まずは幼児が興味をもてるような内容にすることが大切です。
- その幼児が選んだ絵本を学級で読み聞かせる機会をつくらせたり、プロジェクターを利用して話題になるものを大きく映したりして、幼児が注目し興味をもって参加できるように援助します。



おわりに

大人から見れば「どうして?」と思える幼児の行動にも必ずその子なりの理由があります。幼児は大人のように、何をするか決めてから取り組もうとすることはあまりありません。環境に関わることで芽生える興味や関心、周りの人との関わりなどのいろいろな背景のもと、その時その時の小さなきっかけや、心持ちに導かれながら行動しています。その行動がありのまま受け止められるところに安心感が生まれ、園生活は充実していきます。保育者は全ての幼児の理解者として、その子の思いやそのときの状況を読み取り、環境や援助を考え工夫していくことが大切です。

令和3年度の協働研究のまとめとして、成田西子供園での環境と援助の工夫の一部を紹介しました。多くの就学前教育施設において、園の環境を生かしながら全ての幼児にとって心地よい環境構成のために活用されることを願っています。

就学前教育支援センターでは、子供園、幼稚園、保育所などの就学前教育施設が、全ての幼児にとって主体的に生活や遊びに取り組み、健やかに育つ幼児教育の場となるよう、区内の就学前教育施設の保育の質の向上を目指した事業を展開しています。

就学前教育の調査・研究

- 成田西子供園との実践的な調査・研究
- 杉並区教育委員会教育課題研究指定(区立子供園の研究支援)
- 資料センター・図書室の運営



『全ての幼児が主体的に生活や遊びに取り組むための環境構成と援助の在り方』



杉並区立西荻北子供園『幼児期に育みたい資質・能力』

就学前教育の質の向上

- 区立子供園・私立幼稚園を対象とする巡回相談(保育所は保育課が事業担当)
- 保育者向け教育支援相談(個別相談)
- 研修会の開催
 - ・幼児期の特別支援教育研修(年2回)
 - ・すぎっこひろば研修での特別支援教育研修(年1~2回)
 - ・幼児教育研修(年3回)



保育者向け個別相談
~幼児期における特別支援教育~

幼保小連携の推進

- 研修会の開催
 - ・幼保小連携教育研修(年2回)
 - ・幼保小連携担当者連絡協議会(年2回)
 - ・小学校教員のための幼児教育公開(年5回)
- 幼保小連携プログラム・接続期カリキュラムの取組支援
- 幼保小連携充実研究(区立小学校・子供園の研究支援)



杉並区幼保小接続期カリキュラム・連携プログラム『ぐんぐん伸びるすぎなみの子』

発達障害児等への教育的支援(併設する特別支援教育課事業)

- 就学支援相談



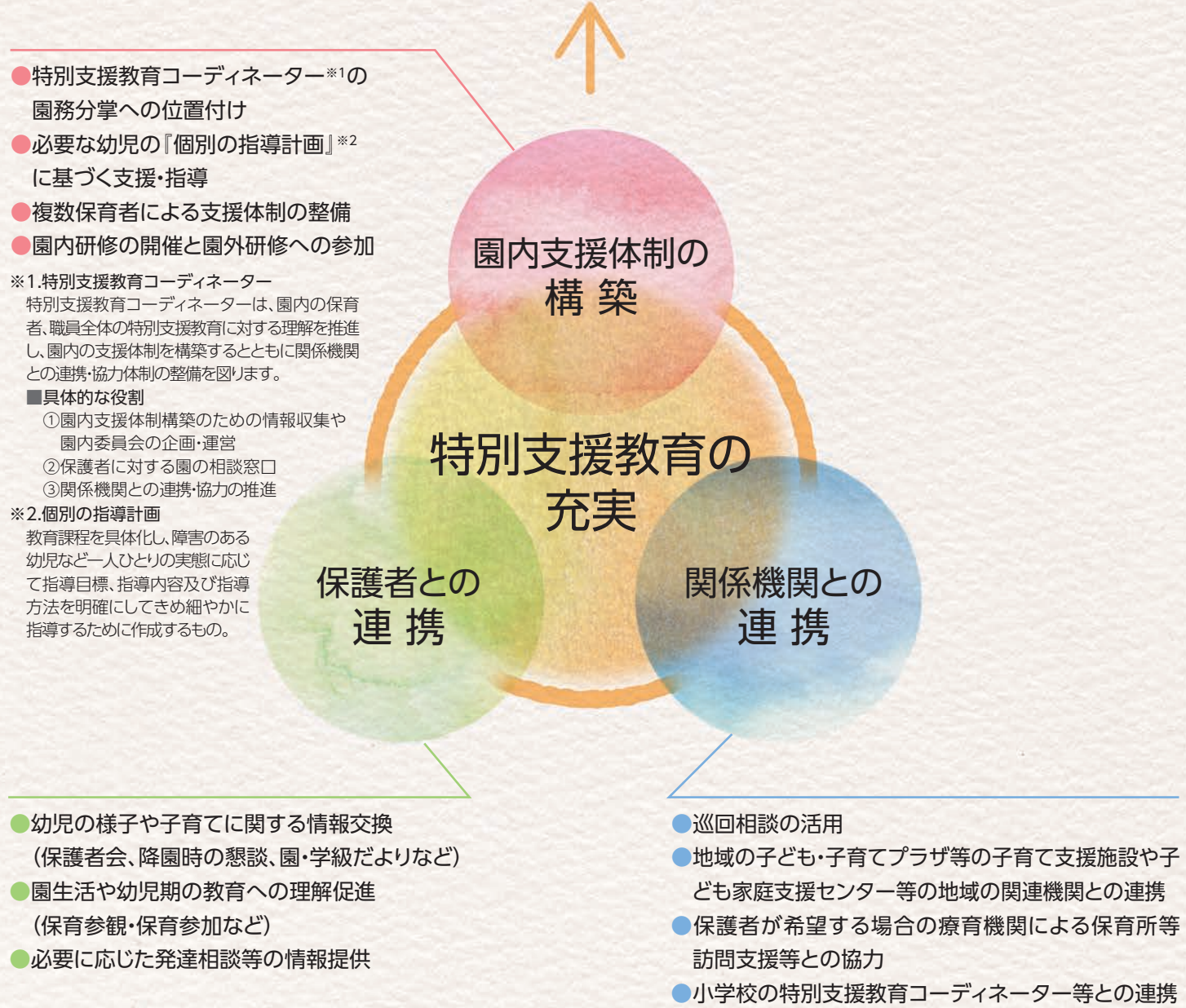
就学支援相談のご案内

併設する杉並区立成田西子供園と就学前教育支援センターでは「全ての幼児が主体的に生活や遊びに取り組むための環境構成と援助の在り方」について研究し、環境を中心にした具体的な手立てを開発しています。

幼児の特性及び発達の状態に応じて、発達を全体的に促していくためには保育の充実を図るとともに、園内支援体制の構築、保護者や地域・関係機関との連携を基にした特別支援教育の充実が重要となっています。

全ての幼児が主体的に生活や遊びに取り組むための環境構成と援助の在り方

特別な配慮が必要な幼児も周りの幼児も、全ての幼児が育つ保育のために



おわりに

大人から見れば「どうして?」と思える幼児の行動にも必ずその子なりの理由があります。幼児は大人のように、何をするか決めてから取り組もうとすることはあまりありません。環境に関わることで芽生える興味や関心、周りの人との関わりなどのいろいろな背景のもと、その時その時の小さなきっかけや、心持ちに導かれながら行動しています。その行動がそのまま受け止められるところに安心感が生まれ、園生活は充実していきます。保育者は全ての幼児の理解者として、その子の思いやそのときの状況を読み取り、環境や援助を考え工夫していくことが大切です。

令和3年度の協働研究のまとめとして、成田西子供園での環境と援助の工夫の一部を紹介しました。多くの就学前教育施設において、園の環境を生かしながら全ての幼児にとって心地よい環境構成のために活用されることを願っています。

就学前教育支援センターでは、子供園、幼稚園、保育所などの就学前教育施設が、全ての幼児にとって主体的に生活や遊びに取り組み、健やかに育つ幼児教育の場となるよう、区内の就学前教育施設の保育の質の向上を目指した事業を展開しています。

就学前教育の調査・研究

- 成田西子供園との実践的な調査・研究
- 杉並区教育委員会教育課題研究指定(区立子供園の研究支援)
- 資料センター・図書室の運営



「全ての幼児が主体的に生活や遊びに取り組むための環境構成と援助の在り方」



杉並区立西荻北子供園「幼児期に育みたい資質・能力」

就学前教育の質の向上

- 区立子供園・私立幼稚園を対象とする巡回相談(保育所は保育課が事業担当)
- 保育者向け教育支援相談(個別相談)
- 研修会の開催
 - ・幼児期の特別支援教育研修(年2回)
 - ・すぎっこひろば研修での特別支援教育研修(年1~2回)
 - ・幼児教育研修(年3回)



保育者向け個別相談～幼児期における特別支援教育～

幼保小連携の推進

- 研修会の開催
 - ・幼保小連携教育研修(年2回)
 - ・幼保小連携担当者連絡協議会(年2回)
 - ・小学校教員のための幼児教育公開(年5回)
- 幼保小連携プログラム・接続期カリキュラムの取組支援
- 幼保小連携充実研究(区立小学校・子供園の研究支援)



杉並区幼保小接続期カリキュラム・連携プログラム「ぐんぐん伸びる すきなみの子」

発達障害児等への教育的支援(併設する特別支援教育課事業)

- 就学支援相談



就学支援相談のご案内

就学前教育支援センター 協働研究

杉並区立就学前教育支援センター／成田西子供園(研究実践園)

令和3年度協働研究 主題

全ての幼児が主体的に生活や遊びに取り組むための環境構成と援助の在り方

就学前教育支援センターでは、併設する成田西子供園と連携し、就学前教育の実践的研究を行っています。その成果を区内の就学前教育施設(幼稚園・子供園・保育所等)に発信し、保育者の資質向上を図り、幼児の発達に応じた質の高い教育を推進することを目的としています。



はじめに

幼児は安心してできる環境の中で、興味をもったものに自分から関わり、試行錯誤を繰り返しながら考え、様々な課題を乗り越えていこうようになります。どこで、誰と、どのように遊ぶか、遊びに必要なものは何か、どのように使うかなど、豊かに遊びを展開する中で幼児は多くの自己決定に出会い、実現する喜びを味わいます。これは、これからの時代を生き抜くために必要な資質・能力を身に付けていく過程ともいえます。

幼児が豊かな遊びを展開していくためには、幼児の自発性を尊重しながら保育者が適切に関わり、意図的・計画的に環境を構成していくことが重要です。また、幼児一人ひとりの特性を理解し、全ての幼児にとって生活しやすい環境と援助を工夫することが求められます。

区内の就学前教育施設では、多様な子どもたちが生活をしています。家庭の中では「気になる子」として配慮が必要になることも多くなってきています。就学前教育施設が全ての幼児にとって、幼児期にふさわしい生活や遊びを積み重ね、一人ひとりの発達に必要な体験が得られる場となるよう、保育者が環境と援助について工夫することは、今後さらに重要になってきています。



全ての幼児が主体的に生活や遊びに取り組むために

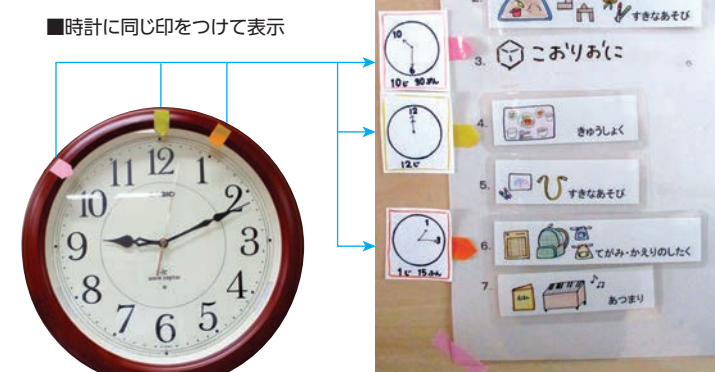
園生活のいろいろな場面においては、保育者の言葉だけでは幼児にイメージがわからないことや言葉の一部分しか印象に残らないことがあります。そのようなときには具体的な説明と共にイラストや写真などを添えて、視覚からも情報を取り入れられるようにすることで分かりやすくなる場合があります。環境を工夫することで、自分で「やりたい」という気持ちで取り組み、「やってみたらできた」という自信につながります。このような自信が幼児の豊かな遊びの土台となります。

学級のみなが生活に見通しをもち気持ちよく生活するための環境と援助

生活に必要な能力や態度の獲得については、大人に教えられたとおりに幼児が覚えていく側面が強調されることもありますが、幼児自身が自発的・能動的に環境に関わりながら、生活の中で状況と関連させて身に付けていくことが重要です。

幼児が見通しをもつために

- 幼児は一日の生活の流れや内容が分かると、安心して自分から取り組んだり、次の活動に移るために今やっているものを終わりにして片付けたりするなど、自分から見通しをもって行動できるようになります。
- **3歳児** では生活の流れをルーティン化する、指示は短い言葉で伝える、座るときには視覚情報としてイラストを並べておくなどの工夫をしています。
- **4歳児** ではカレンダーに予定を記したり、その日に読み聞かせする絵本を提示したりして、視覚情報からも生活の流れを学級で共有しています。
- **5歳児** では一日の予定表の時刻と時計の文字盤に同じ印を付けて提示しています。当番活動などは幼児が相談して決めた内容を予定表に書き込むことで、自分たちで集まって活動を進めていく姿も見られます。予定表は、当事者だけでなく他のグループにとっても、友達の取組を共有する情報になります。



幼児が自分から生活を進めるために

- 園には所持品の始末、食事、排泄などの生活に必要な活動があります。
- 園生活の自然な流れの中で幼児自身が必要性に気づき、自分でしようとする気持ちをもてるようになることが大切です。
- 絵や写真で手順を示すことは視覚情報となり、幼児が自分から行動する手掛かりとなります。最初は絵や写真を確認しながら取り組む姿もありますが、次第に確認しなくても自分から行なうようになります。



手順が身に付きにくく、途中でほかのことに注意がそれやすい幼児への配慮

- ★ 個別の幼児のための手順カード (新幹線が好きな4歳児のための例)
- 手洗いを済ませ、カードをめくると新幹線の運転席の絵が出てくる
- 支度が全部終わると、カードの絵は新幹線全車両になる
- ★ 幼児の姿 ● 援助と環境の工夫
- ★ 身支度や所持品の始末などが身に付きにくい幼児もいます。
- その都度、保育者が声を掛けるのではなく、幼児が自分で気付いて行動できるよう、学級みんなの掲示とは別に一連の流れの絵カードを用意するの工夫です。例えば、済んだ内容のカードをめくると絵が変化し、最後にはその幼児が大好きな電車の絵になるようにするなど、絵をめくる楽しさから自分から行動する姿を期待します。始めと終わりがはっきりすることで、一連の流れをつかみやすくなります。
- 幼児がやり遂げたら次に楽しいことがあることや、「待っていたよ」などと保育者の気持ちを言葉にして伝えていくことも幼児の意欲を高めます。

幼児の自発的活動としての遊びが充実するための環境と援助

自発的活動としての遊びは、幼児の成長や発達にとって重要な体験中で、物事に対する他の幼児との受け止め方の違いに気付くように関わらなければならない数や量の道具や用具、素材があること、それらが

です。幼児は身近な環境に興味をもって主体的に関わり、試行錯誤を経て、周囲の環境に様々な意味や関わり方を発見します。また、友達と遊ぶ際、互いに自分の思いを主張し合い、折り合いを付ける体験を重ねていきます。このような遊びを通した体験を豊かにしていくためには、幼児扱いやすいものであり、分かりやすく心地よく整理されていることなどが支えとなります。

幼児が主体的にものを取り込んで遊びを楽しむために

- 幼児は身近な環境に好奇心をもって関わる中で、新たな発見をしたり、どうすればもっと面白くなるかを考えたりします。体験したことをさらに違う形や場面で活用し、遊びをますます楽しいものにしていきます。単に環境の中にあるものを幼児が利用するだけでなく、環境の一つ一つが幼児にとって気付きや発見につながり、環境に関わる態度や意欲を育てるものになっていることが大切です。



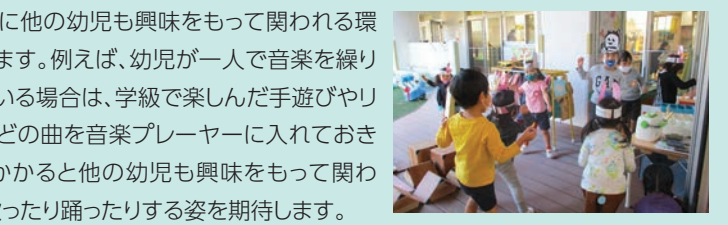
幼児が感情を表現しながら人との関わりを深めるために

- 遊びが豊かになって幼児同士の関わりが深まってくると、遊びの中でトラブルが起こることも度々あります。自分中心の主張をしながらも少しずつ相手に分かるように伝えようとし、相手に伝わることで親しみを感じるようになります。次第に相手の思っていることにも気付くようになり、幼児同士の関わりは深まります。そのためには保育者が幼児の気持ちを代弁したり状況を伝えたりする援助が大切です。
- そのようなときに、表情の絵カードを使うと、幼児は相手の気持ちに気付いたり自分の気持ちを説明したりすることができるようになります。

- 初めは気持ちが高ぶり、保育者や相手の言葉を聞かない幼児も、絵カードによって表情が分かり、気持ちを表す言葉も増え、落ち着いて話し合いができることもあります。
- 幼児期は人との関わりの中で様々な出来事を通して、うれしい、悔しい、悲しい、楽しいなどの多様な感情体験を味わう時期です。マスクの着用で相手の気持ちが読みにくい状況が続く中、表情の絵カードを視覚情報として活用することで、互いの感じ方や考え方に気付けることもあります。

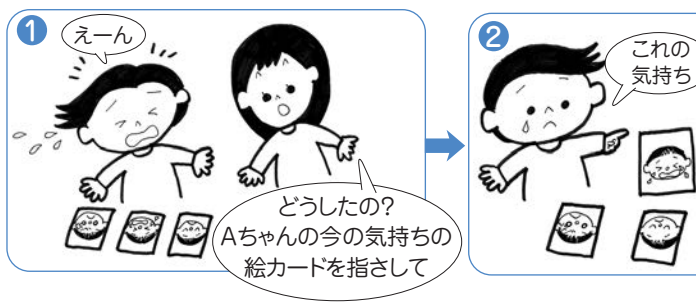
人との関わりに関心がなく、自分の好きな遊びを繰り返す幼児への配慮

- ★ 幼児の姿 ● 援助と環境の工夫
- ★ 同じ遊びを一人で繰り返し楽しむ幼児もいます。
- 保育者は「いろいろな活動に参加してほしい」「友達と遊んでほしい」と願いがちですが、まずは特定の遊びをする幼児に興味をもって大切にしてあげます。一人で何かに集中して取り組む時間や一人で休める空間を用意し、安心して過ごせるようにします。
- 特定の遊びに他の幼児も興味をもって関わる環境を用意します。例えば、幼児が一人で音楽を繰り返し聞いている場合は、学級で楽しんだ手遊びやリズム遊びなどの曲を音楽プレーヤーに入れておきます。曲がかかると他の幼児も興味をもって関わり、一緒に歌ったり踊ったりする姿を期待します。

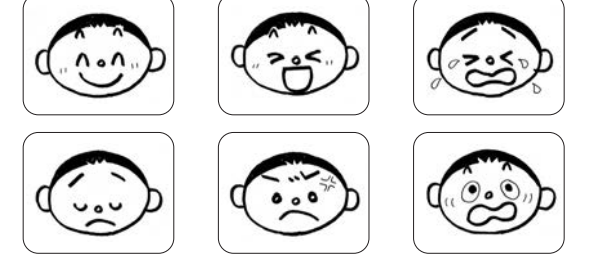


表情の絵カードの使い方 (例) 自分の気持ちを伝える

- 1枚の紙に、3〜6種類くらいの表情(例えば、「うれしい」「悲しい」「怒る」「驚く」「困る」など)を、分かりやすくはっきり書きま。1枚ずつの絵カードにした時は、一列に並べます。
- 自分の気持ちがまだ未分化な幼児や気持ちを言葉で伝えられない幼児に、この表情カードを見せてどの気持ちが選べます。幼児が選んだ表情に、「保育者は必ず「怒っているんだね」や「悲しいんだね」などの言葉を添えて、表情と言葉を結びつけるようにしていきます。



気持ちを表す表情の絵カード



衝動をコントロールすることが難しい幼児への配慮

- ★ 幼児の姿 ● 援助と環境の工夫
- ★ 目の前の出来事に反応して衝動的に動いたり、自分の思いをうまく言葉で表現できなかったりしてトラブルになることが多い幼児がいます。
- 保育室の一角や保育室から近いところにスペースを設定し、そこに行けば「落ち着ける」「気持ちを切り替えられる」という体験を積み重ねられるようにします。
- 保育者が「残念」「なぜ?」と思っていることを、表情の絵カードを使って伝えることから始めることも、幼児の気持ちを落ち着かせます。
- 気持ちが受け止められたと感じる体験を積み重ねることで、幼児が少しずつ気持ちを整理し、安心できるよう保育者は援助します。

話を聞く態度を育てるための環境と援助

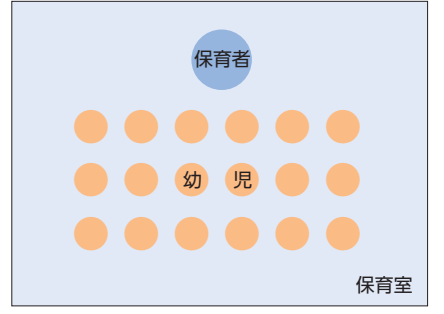
園生活の中で幼児が多様な遊びや活動を楽しみ、経験を広げながら人との関わりを育むために、話を聞く力は大切です。幼児が集中して話を聞き、自分で分かって行動できるようになることは、幼児が学びを深めていくために重要です。そのためには話し手に注目できるように落ち着いた場を設定したり、話の情報量を減らして簡潔に話したりするなどの援助の工夫が大切です。話を聞くことが楽しいと感じる体験を重ねた結果として、幼児の聞く力が育ち、自分の思いや考えを伝える力も育ちます。

幼児が話に集中できるように

- 日常的な集まりでは座り方を工夫することで、学級のみならず、
- 保育者は「いろいろな活動に参加してほしい」「友達と遊んでほしい」と願いがちですが、まずは特定の遊びをする幼児に興味をもって大切にしてあげます。一人で何かに集中して取り組む時間や一人で休める空間を用意し、安心して過ごせるようにします。
- 特定の遊びに他の幼児も興味をもって関わる環境を用意します。例えば、幼児が一人で音楽を繰り返し聞いている場合は、学級で楽しんだ手遊びやリズム遊びなどの曲を音楽プレーヤーに入れておきます。曲がかかると他の幼児も興味をもって関わり、一緒に歌ったり踊ったりする姿を期待します。
- 聞くだけでは理解が難しい場合には、絵や写真、文字を効果的に取り入れます。
- 保育者の背景や視界に入る空間をスッキリさせると、どの幼児も保育者に注目しやすくなり、話を聞くことが楽しくなります。

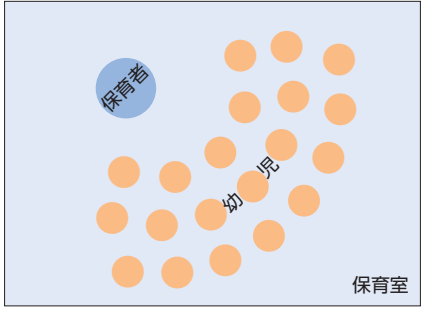
向かい合って座る

保育者と向かい合うように幼児が座ります。端に座る幼児の正面は壁になるので、横に広がらないようにします。幼児にとって列や順番が分かりやすく、自分たちと並べます。



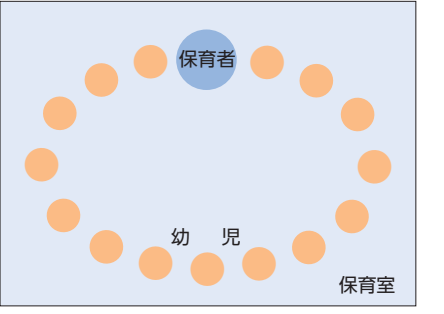
扇型に座る

扇型に座ると、どの位置からも幼児の正面は保育者になります。保育室の角に保育者が立つと壁に囲まれる雰囲気があり、落ち着いて話を聞ける幼児もいます。



円形に座る

幼児と保育者が円形に座ると、話をする人の顔が見えて互いの発言に注目できます。円形に座るときには「これから丸いお皿みたいな座ります」と伝えると幼児にはイメージしやすいようです。



読み聞かせや保育者の話に関心がなく、話を聞くことが苦手な幼児への配慮

- ★ 幼児の姿 ● 援助と環境の工夫
- ★ 学級で集まり、話を聞くことが苦手な幼児もいます。
- 学級のみならず、話を聞く活動に参加させようとするよりも、まずは幼児が興味をもてるような内容にすることが大切です。
- その幼児が選んだ絵本を学級で読み聞かせの機会をつくり、プロジェクターを利用して話題になるものを大きく映したりして、幼児が注目し興味をもって参加できるように援助します。

